

日中両言語の周辺部表現における文副詞的機能の談話標識化の対照研究

—認識表明の「実は」と「其實 (qishi)」を中心に—

江俊賢(コウシュンケン) (名古屋大学〔院〕)

本発表は、本来名詞用法である日本語「実(N)は」と中国語「其(qi、その)實(shi、核/実)」の文副詞的機能から談話標識への機能拡張の違いを通時的に考察する。なお、発話における左と右の周辺部の談話機能(Discourse Functions at the Left and Right Periphery)の違いが近年注目されている(Beeching & Detges 2014、柴崎 2015)。本発表は周辺部の談話機能について、日中の発話内位置と発話機能の違いを明らかにした。

(1)のように、文末位置に現れ、質疑応答の場面で用いられた日本語の「実は」は、中国語の「其實」の表現は不自然である((1'))。また、(2)は「実は」で表現されにくい例であると思われる((2'))。

- (1) F130: あと、話の、何ていうかな、ごめん1人、1人で話してるんですけど、話を、例えばあたしが話をしたあと、どういうふうに返すとか。(ええ) そういう、どうやってして会話が進むかとか。(ふーん) いろんな、あたし自身が、というという言葉(ええ) 研究してるんですけど、それがどういうふうに(ああ)使われるかまた。そういうためなんですけど。

M004: でも、話し方がね、あの一、日本人に説明してるしゃべり方じゃないよ。 <質疑>

F130: あ、ごめん、あたし、日本語教師なんです、実は。 <返答>

(MC;< >は筆者より)

- (1') M004: 可是，你這個說話方式，那個，這不是跟日本人說明的說話方式啊。 <質疑>

F130: 啊，抱歉，{我是日文老師，?其實。} <返答>

- (2) F1: 他們有的都修到..24 學分耶

M: ..uhuhn

F1: ..我真的覺得好誇張喔

M: ..其實二十四學分..還好啊

F1: ..很多[耶]

(NCSC)

- (2') F1: 彼らは24 単位を取っているよ。

M: うんうん

F1: 本当に多すぎるよ

M: {?実は / だいたい / そもそも}、24 単位って、そんなに多くないと思うけど。

F1: それは多いよ。

(1)のような質疑応答の場面は、文末の「其實」でなぜ不自然なのだろうか。なお、(2)について、文頭に現れた「其實」と「実は」の談話機能の作用域の問題が伺える。例えば、(2')は「思う」あるいは文全体を修飾するという読みでは、「実は」がどこに位置していても不自然であると思われる。しかし、「実は」が「そんなに多くない」を修飾すると無理に解釈すると、容認度が上がります。本研究は、(1)や(2)からみた発話内位置の談話機能とその談話機能の作用域などの問題を中心に検討していきたいと思う。

まず、コーパスにおいて、文頭に生起し、文副詞的機能を果たす「其實」と「実は」は通時的に増加

していることが見られた。例えば、日本語の「実は」は、コーパス「BCCWJ」で文頭に現れた例が44例(1970年代)、144例(1980年代)、361例(1990年代)、729例(2000年代)という増加傾向が観察された。一方、文頭に現れた中国語の「其實」は、コーパス「CCL」では、1例(戦国時代, B.C. 500-221)、1例(漢代, B.C. 202-C.E. 220)、2例(六朝, C.E. 220-598)、1例(隋唐, C.E. 581-807)、46例(宋代, C.E. 960-1279)、36例(明代, C.E. 1368-1644)、237例(清代, C.E. 1644-1912)、9602例(近代、現代, C.E. 1912~)と増加傾向にある。この傾向は、「実は」と「其實」は、本来名詞から副詞への機能拡張のほかに、現代用法ではさらに文頭の位置に現れ、「実は+XP。」と「其實+XP。」の構文となり、文副詞的機能の拡張を確認できる。

なお、同じく2000年代以後の会話データで作られた「名大会話コーパス(Meidai Dialogue Corpus ; 以下, MC)」と「政治大学漢語話し言葉コーパス(The NCCU Corpus of Spoken Chinese ; 以下, NCSC)」では、それぞれの違う傾向が見られた。まず、「実は」は、MCで、文頭が22例(19%)、文中が67例(68%)、文末が15例(13%)となり、「其實」は、SCで、文頭が120例(38%)、文中が191例(61%)、文末が3例(1%)となっている。日中両言語は文中用法の使用頻度の差異が顕著ではないが、文頭用法は「其實」が「実は」の倍となり、文末用法では「実は」の方が「其實」より多く検出された。

談話機能については、日中両言語ともに、左の周辺部の談話機能は「情報導入機能」、「注意を引く」、「前の談話につなげる」などの機能を果たしており、機能的に一致していると思われる。しかし、(2)のようなく前の言説に反して>という読みではない場合、中国語の「其實」の左周辺部の談話機能は、さらに文頭で聞き手への配慮を示す「メタ語用論的機能」を果たし、聞き手の方へシフトしようというコミュニケーションが意図され、社交的マーカ(phatic marker; Lima 2002)となる。こういう場合、日本語の左周辺部の「実は」は表現できないことを観察した。一方、右の周辺部の談話機能について、日中両言語もく前の言説に反して>という文副詞的意味を保っているが、談話機能の作用域は「全発話の内容を覆す」範囲に拡大している。また「返答を標示する」発話機能を果たす(1)は、左と右の周辺部の双方とも表現できる「実は」に比べて、中国語の「其實」が左周辺部の表現に限定していることを明らかにした。日中両言語の周辺部の表現の違いの理由としては、両言語の語順パターンの違いからではないかと思われる(日: SOV ; 中: SVO)。語順パターンと周辺部の発話機能の問題については、今後の課題にしたい。

表1 「実は」と「其實 (qishi)」の発話内位置と談話機能 (主要部分)

談話機能 / 発話内位置	左の周辺部 (LP) / 文頭	右の周辺部 (RP) / 文末
(I) 文副詞的意味<前の言説に反して>	「実は」、「其實」	「実は」、「其實」
(II) 断定回避、社交的マーカ	「其實」	---
(III) 応答的マーカ	「実は」、「其實」	「実は」

主要参考文献

- Beeching, Kate, and Ulrich Detges. 2014. "Introduction" In Beeching, Kate, and Ulrich Detges. (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, Leiden: Brill, 1-23.
- Traugott, Elizabeth Closs. 2017. "A Constructional Exploration into 'Clausal Periphery' and the Pragmatic Markers that Occur There" 小野寺典子(編)『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』ひつじ書房: 東京, 55-73.
- Wang, Y. F., Tsai, P. H., and Yang, Y. T. 2010. "Objectivity, Subjectivity and Intersubjectivity: Evidence from *qishi* ('actually') and *shishishang* ('in fact') in Spoken Chinese" *Journal of Pragmatics*, 42(3), 705-727.